

吉見俊哉『平成時代』を読む

写真は社会学者吉見俊哉さんによる岩波新書。吉見さんらしいタッチで、「平成時代」30年を綴る。

表紙カバー裏から一平成の30年は「壮大な失敗」、今後も続く「失われる半世紀」への序曲であった……。「失敗」と「ショック」の意味を多分野にわたりシビアに総括することからしか、新たな展望は描けない。経済、政治、社会、文化でこの30年間、何がおきたのか。社会学者吉見俊哉が「ポスト戦後洙会」の先に待っていた空虚な現実を総括する。

参考になったことは多いが、とりあえず「おわりに」の一部を抜粋して紹介したい。



メディアが盛んにそう語るから、「平成」がひとまとまりの時代に見えてくるわけで、メガネが「現実」を出現させているにすぎない。それなら「平成時代」とは、メディアが製造する新商品のカテゴリーにすぎないのか。このメガネがなければ、この時代は歴史的なまとまりをなさないのか。一否。天皇在位との対応が偶然でも、なお「平成」を一つの「時代」として捉えるべき偶然以上の何かがある。

この30年間は、何よりも「失敗」と「ショック」の時代だった。本書ではまず、「平成」が始まる直前の金融政策の失敗がいかにバブル経済を肥大化させ、またその崩壊後、日本企業が未来を見誤りどう失敗を重ねていったかを検証した。次いで、政治改革から政治主導に向かうことを目指した平成の政治が、日本新党ブームや社会党の自滅、小泉改革のポピュリズム、そして民主党政権の大失敗を経て安倍政権の官邸主導に行き着く過程を確認した。さらに社会の次元で、平成の日本を襲った様々なショックが、外発的であると同時に内発的でもあったこと、つまり二つの大震災は外からもたらされたものでも、福島第一原発事故はもちろん、オウム真理教事件や社会に悪意を抱いた数々の犯行、それに格差の深刻な拡大と止まらぬ少子化等々は内発的なショックであり、それらは日本社会を根底から変えつつあることを指摘した。最後に文化の次元では、諸々の崩壊を予言するかのように、昭和の終わり頃から日本が「終末」の予感にとらわれてきたこと、そして平成を通じ、戦後に作り上げられたアメリカニズムとナショナリズムが一体化した文化の体制が崩れたことを示した。

社会学者の吉見さんらしい「平成時代」へのアプローチであり、多くの示唆を得た。ただし、本書の核心でもある「失敗」の捉え方に疑問を感じた。本書の122ページに「失敗」とは、ある主体が目指した目標を達成できず、むしろそれとは著しく異なる結果を生んでしまった場合を指す、と書いている。では政治の世界で、どんな「目標」でも評価されるのか。「目標」と達成プロセス、手続きこそが問われるべきではないのか。

(2019年9月21日)